

2024. 6. 23 (日) 使徒16:16~24

16:16 さて、祈り場に行く途中のことであった。私たちは占いの霊につかれた若い女奴隷に出会った。この女は占いをし、主人たちに多くの利益を得させていた。

16:17 彼女はパウロや私たちの後について来て、「この人たちは、いと高き神のしもべたちで、救いの道をあなたがたに宣べ伝えています」と叫び続けた。

16:18 何日もこんなことをするので、困り果てたパウロは、振り向いてその霊に、「イエス・キリストの名によっておまえに命じる。この女から出て行け」と言った。すると、ただちに霊は出て行った。

16:19 彼女の主人たちは、金儲けする望みがなくなったのを見て、パウロとシラスを捕らえ、広場の役人たちのところに引き立てて行った。

16:20 そして、二人を長官たちの前に引き出して言った。「この者たちはユダヤ人で、私たちの町をかき乱し、

16:21 ローマ人である私たちが、受け入れることも行うことも許されていない風習を宣伝しております。」

16:22 群衆も二人に反対して立ったので、長官たちは、彼らの衣をはぎ取ってむちで打つように命じた。

16:23 そして何度もむちで打たせてから二人を牢に入れ、看守に厳重に見張るように命じた。

16:24 この命令を受けた看守は、二人を奥の牢に入れ、足には木の足かせをはめた。

<説教>

パウロたちがヨーロッパ大陸で最初に福音を宣べ伝えた町が、ローマの植民都市だったピリピでした。安息日に、町の門の外の川岸にあった祈り場に集まって来た女性たちが主イエスの福音を聞きました。ティアティラの市の紫布の商人で神を敬う人だったリディアの心を主イエスが開いてくださり、パウロの語る福音に心を留めるようにしてくださいました。リディアは主イエスを信じ、彼女とその家族の者たちがバプテスマを受けました。更にリディアは自分の家をパウロたちの宿泊場所として提供しました。そのようにしてピリピで主イエス・キリストの教会が始まりました。

そのように始まったピリピ伝道でしたが、そこでもやはり悪魔の妨害があり、悪霊との戦いがありました。真の神、主イエス・キリストではなく、悪魔とその手下ども悪霊に支配され、従う人間の妨害があり、それと対決することとなりました。人間が作った宗教、人間の欲望、人間の習慣などと対決することになりました。

パウロたちは、リディアと出会ったときと同じように祈り場に行こうとしていました。その途中で〈占いの霊につかれた若い女奴隷に出会った〉のです(16)。〈占い〉とは「デルフォイ（ギリシアで最も神聖な地域、太陽神アポロンの聖地）の神託」を告げるものでした。この若い女性は〈奴隷〉でしたから、彼女を使う〈主人〉がいました。彼らがこの女性を使って〈占い〉の商売をして、〈多くの利益を得〉ていました。ピリピの町の多くの人たちが（もしかしたらピリピ以外の町からも人々がたくさん来て）この女性に占ってもらい、多くのお金を〈主人たち〉に支払っていたのでしょうか。その意味では彼女は有

名な、人気のある「カリスマ占い師」だったかもしれません。しかしそうやって「あこぎ」な〈金儲け〉(19)のための商売(商習慣とも言うべき)が行われていたのです。この女性は〈占いの霊〉につかかれていましたが、〈主人たち〉は「食欲の霊、金銭欲」に支配された「金の亡者(もうじゃ)」だったに違いありません。

かつてイエスがゲラサ人の地に行かれたときに悪霊につかれた人が「神の子よ」、「いと高き神の子イエスよ」などとイエスに向かって叫んだことがありました(マタイ8章、マルコ5章、ルカ8章)。ピリピの女奴隷に取りつき支配していた〈占いの霊〉(悪霊)も、パウロたちが何者であり、何をしているのかを見抜きました。それで〈彼女はパウロや私たちの後について来て、「この人たちは、いと高き神のしもべたちで、救いの道をあなたがたに宣べ伝えています」と叫び続けました(17)。

彼女が〈何日もこんなことをするので〉パウロは〈困り果て〉、〈振り向いてその霊に、「イエス・キリストの名によっておまえに命じる。この女から出て行け」と言〉いました。〈すると、ただちに霊は出て行きました(18)。こうして彼女は〈占いの霊〉、悪霊の支配から解放されました。そしてそれは彼女を利用して〈多くの利益を得〉ていた貪欲な〈主人たち〉の支配からの解放でもあったに違いありません。そのように彼女を解放してくださったのは、「イエス・キリストの名によっておまえに命じる」とパウロが言ったように、主〈イエス・キリスト〉ご自身でした。イエスの御霊、聖霊が〈占いの霊〉悪霊に打ち勝ち、彼女の中から〈出て行〉かせたのです。

さて〈占いの霊につかれた若い女奴隷〉が〈何日もこんなことをするので〉パウロが〈困り果てた〉のはなぜだったのでしょうか。先主日にも見たように、ピリピはローマの植民都市で、ローマー色、ユダヤ人もユダヤ教の力も小さかったようです。つまり聖書とか天地万物の造り主とか唯お一人の神とか約束の救い主キリストとかについて人々は見向きもしません。そんな中で人々に知られた人気占い師が、頼みもしないのにパウロたちの後について来てくれて、しかも「この人たちは、いと高き神のしもべたちで、救いの道をあなたがたに宣べ伝えています」と〈何日も〉〈叫び続け〉てくれるのです。「あの占い師が言っているなら行ってみようと」と、これ以上ない最高の宣伝として、何にも困ることはなかったのではないのでしょうか。

しかし、もちろん皆さん「何か違う。いや全然違う」とお気付きのことでしょう。一言で言えば、「悪霊の奉仕によって福音宣教が行われても、それは福音に相応しくない」ということです。主イエスが、ゲラサ人の地で悪霊を使い、悪霊に助けをもらってご自身を知らせようなどとはなさいませんでした。悪霊どもも神は唯一だと信じて身震いしています(ヤコブ2:19)が、決してその唯一真の神に信頼しようとしません、心から喜んで服従しようとしません。また彼女が言った「いと高き神」とか「救い」という言葉は、ギリシア・ローマ世界の神々とそれによる救いを教える宗教で普通に使われていたものでした。だから彼女の宣伝を聞いてからパウロの語る主イエス・キリストの福音を聞いても、「いと高き神による救いの道」をギリシア・ローマの宗教の神による救いと自分勝手に理解してしまったことでしょう。彼女の言葉は形式上は真理のように聞こえますが、彼女をして語らせているのが悪霊である以上、本当の意味で真理ではなく、また主イエス・キリストの福音ではなかったと言うほかありません。真理は、主イエス・キリストの福音は、主によって心開かれ、自分自身がそれに聞き従う信仰をもって語られる必要があるのです。

さて、彼女から出て行った霊が〈彼女の主人たち〉に今度は入ったかどうかは知りませんが、今度は彼らがパウロたちに敵対して来ました。〈金儲けする望みがなくなった〉という全く個人的な欲望が本当の理由なのに、いかにも「公共の秩序」が乱されたからであるかのような理由でローマの役人に訴えました(19-21)。もちろん、主イエスの福音はそれまでピリピの人々が聞いたこともなく、それ故に受け入れたこともなく、また主を礼拝することなど行ったこともないことではあったでしょうが。

主人たちの言葉に惑わされたか、頼りにしていた占い師がいなくなって怒ったのか、ピリピの多くの人々もパウロとシラスに反対するようになりました(22)。ローマの役人たち役人たちで、後でパウロが正当に抗議するように、正式な取り調べも裁判もしないで二人をむち打ち、牢に入れてしまいました(22-24)。言わば「官民一体となって」の迫害でした。彼らに悪霊がついていたとは直接は書かれていませんが、彼らの背後にも神に逆らう悪霊が働いていたことは間違いないでしょう。

主イエスの真理の福音が宣べ伝えられ、偶像礼拝が否定され、人間の悪しき欲望に従うことが否定されるときに、確かに悪魔とその手下である悪霊どもは震え上がります。しかしそれも言わば一瞬で、彼らはむしろますます真の神を憎み、主イエス・キリストに怒り、聖霊に逆らうように働くのです。本当の意味での〈いと高き神のしもべ〉〈救いの道〉なる主イエス・キリストの福音が宣べ伝えられ、その主を信じる者が起こされる所では悪魔とその手下である悪霊どもの攻撃が、信じる者に対し、また宣べ伝える者に対して必ずあるのです。私たちは〈御霊の剣、すなわち神のことばを取り〉(エペソ 6:17)、〈イエス・キリストの名によって〉戦い、主の勝利に主とともに与るのです。